

## 序文——『関西大学法学論集』130周年記念号の刊行に寄せて

1886（明治19）年11月4日に、大阪西区京町堀の願宗寺本堂において、夜間の関西法律学校が西日本で最初の法律学校として開校した。関西大学の前身であると同時に、関西大学法学部の淵源にあたる。第17代学長の岩崎卯一によって「関大の始祖」と表現された児島惟謙の強力な支援の下に、大阪事件を契機として当地に集まった小倉久、井上操をはじめとする若き司法官たちが、校主吉田一士のよびかけに応じて関西法律学校の創立を導いた。

さて、司法卿の江藤新平が主導した明治初年の民法典の編纂は、もっぱらナポレオン法典の翻訳作業を中心に精力的に進められたとされているが、司法省顧問として来日したボアソナードとジョルジュ・ブスケは、1872（明治5）年から明法寮さらには司法省法学校を舞台にフランス語で法学教育をおこない、やがて1885（明治18）年に東京大学法学部に統合されるまでの間に、4期にわたり多数の法律学士を育成した。

よく知られているように、本学の創立者12名のうち、吉田一士、土井通夫、有田徳一の3名を除いた残りの9名は、大阪控訴院と大阪始審裁判所に関わりのある司法官であった。ただし、児島惟謙の竹馬の友とされる実業家の土井通夫も、司法と深い関係を持っている。当時の土井は、大阪実業界の指導者として五代友厚を継いで大阪商業会議所会頭職にあったが、1872（明治5）年に司法省に入って12年間は司法官として勤務しており、1871（明治4）年に司法省に入った児島惟謙と生年を同じくする職場仲間でもあった。だとすれば、司法省と直接の接点を見出すことができないのは、吉田と有田の2名でしかない。

そして、創立者12名のうちで、本学創設に主導的役割を果たしたとされる井上操と小倉久は司法省法学校第1期生、志方鍛、鶴見守義、手塚太郎は司法省法学校第2期生、両者併せて5名が本学の創立者に名を連ねた。その他にも、堀田正忠は1873（明治6）年に来日したボアソナードの住みこみ書生として法

典の翻訳・編纂の手伝いをした後に、検察官となった。つまり、ボアソナードの教えを親しく受けた彼らが、関西法律学校の創立をリードしたのである。

司法省法学校が持っていた影響力の大きさは、創立時に止まらない。関西法律学校第2代校長の水上長次郎、第4代校長の一瀬勇三郎、第5代校長・第6代学長の加太邦憲、第7代学長の河村善益は、いずれも司法省法学校でボアソナードの薫陶を受けた生徒であり、幾人かの創立者とは司法省法学校の同期生の関係にあった。さらに、矢野茂（司法省法学校促成科）、掛下重次郎（第2期生）など、関西法律学校に縁を持つ司法省法学校の卒業生は少なくない。かなり後の時期になっても、1917（大正6）年より第10代学長を務めた織田萬（司法省法学校第4期生）がいる。

以上述べてきたことから、創設期の関西法律学校関係者の大半は、青年時代にボアソナードからフランス法の教育を受けて、彼の学恩を心に強く刻んだ人たちだったといつてよい。こうした事情は、関西大学に限ったことではない。明治大学の前身である明治法律学校の創立者である岸本辰雄、宮城浩蔵、矢代操らも司法省法学校第1期生であり、現在の法政大学につながる東京法学校や和仏法律学校もまた、ボアソナードの愛弟子である薩埵正邦や堀田正忠などの司法官、司法省法学校で学んだ橋本胖三郎や梅謙次郎といった法律学士によって設立運営された。ボアソナード自身が、東京法学校および和仏法律学校で、12年間にわたって無報酬で講義を担当したという。こうした事実を知るとき、偉大な学者にして教育者であったボアソナードが示した圧倒的な力量、情熱、功績の大きさを、まざまざと感じる。

一方、ボアソナードにとっても、関西法律学校は特別な存在であった。1889（明治22）年4月、フランスへの一時帰国の途次に関西法律学校を訪問したボアソナードは、生徒たちを前にして、「私はあなたたちを他人とは思っていません。あなたたちの先生たちは、ほとんど私の門人なのですから、私はあなたたちの祖父にあたります」と述べて、関西法律学校の生徒一人ひとりの頭を撫でてまわったという。

法学部130周年の記念の年を迎えるに当たり、以上の歴史を振り返り、今さ

らながらボアソナードの偉大さと草創期の関西法律学校関係者の燃えるような情熱を思い起こしている。創立者たちの熱さと名誉ある学統を今に受け継ぐ関西大学法学部の研究・教育を通じて、これからも変わらず若き学生の未来が力強く拓かれんことを、心より祈念する次第である。

2016年10月17日

関西大学

学長 芝 井 敬 司

## 序

関西大学は1886年に関西法律学校として創立された。関西大学法学部の歴史はこの関西法律学校から始まり、2016年、法学部は大学とともに創立130周年を迎えた。先立つ2006年には関西大学は創立120周年を祝い、法学部でも、『法と政治の二十一世紀 関西大学法学部百二十周年記念論文集』（法律文化社）の発行や「日本司法支援センター（法テラス）」を主題とするシンポジウム等の記念事業を行ったが、その後10年を経て、関西大学法学論集130周年記念特別号を発刊する運びとなった。

この10年で、この国の法学部を取り囲む環境は大きく変わった。

司法制度改革審議会意見書（2001年）を受けて、2004年に法科大学院制度が創設され、また、同年、裁判員法が制定された（2009年、施行）。とくにも法科大学院制度は、法学研究及び法学教育に対して看過できない影響を及ぼすものであったが、その功罪を評価するには、なお慎重を期さねばならないだろう。この間、関西大学法学部も大きく変わり、2008年、従来の2学科制から「法学政治学科」の1学科制へと改組し、併せてカリキュラムの全面的改定を行い、学部生の多様な関心や進路にきめ細かに対応すべく、法学・政治学の横断的で柔軟な履修を可能とした。今後も、われらは、時代と社会の要請を省察しつつ、あるべき法学教育を模索する責務を自覚している。

他方で、変わらぬこともある。

関西大学法学部は、「正義を権力より守れ」との建学の精神を継承しつつ、現代社会における喫緊の課題に対して取り組んできた。あらゆる信念が「正義」の言説を纏って主張され、「正義」と「権力」との区分が不分明な時代である。そのなかで、この伝統を受け継ぐことには理論的・実践的困難を伴うが、これまでもそうであったように、教員個々人の弛まぬ研究こそが、力の源泉であると信ずる。本書には12篇の論文が収められており、執筆者である教員各人

が、その専門領域において問われるべき諸課題への取り組みを通して、この伝統を、再＝現前している。

ここに、法学部創立130周年を祝賀する特別号を発行しえたことを慶賀し、法学部・法学会の今後の一層の発展を祈念する次第である。

2016年10月24日

関西大学

法学部長 小 泉 良 幸